

地域発健康推進考える

弘前大学は12日、東京都千代田区の一橋講堂で「COI-NEXT Well-being(ウェルビーイング)イノベーションフォーラム2025」を開いた。全国の研究者らが、講演やパネルディスカッションを通して、住民のウェルビーイング(心身ともに幸福な状態)や持続可能な社会の実現を目指すCOI-NEXTの取り組みと今後の方向性について意見を交わした。

(菊谷賢)



「地域から世界へ発信する大学として挑戦を続けたい」とあいさつする弘前大学の福田眞作学長(壇上中央)

弘大、都内でフォーラム

フォーラムには、オンラインを含め約2800人が参加。医療や行政関係者ら約30人が登壇した。

基調講演で、弘大COI-NEXT拠点長の村下公一副学長が、2005年から始まった若木健診のデータを基に、一人一人に合った病気予防策を提言する事業が着実に進んでいることを報告。企業・団体との共同研究は25に上り、写真撮影によって内臓脂肪や体の状態が分かるサービスなどが生まれていることを説明した。

弘大が開発したQOL健診(啓発型健診)が全国に広がっていることにも触れ「社会に役立つことを目的とした活動は、産学官民の強固なつながりで成り立っている」と述べ、さらなる連携強化に意欲を示した。

坂田一郎・東京大学総長特別参与は「弘前発の製品・サービスが大きな市場に

出て洗練されることは地域にも大きな便益をもたらす。今後は医学を基盤に、地球規模の課題にも乗り出してほしい」と期待感を示した。弘前市企画課の千葉

勝博・地域振興担当総括主査は、同市で10月から始まるメタボリック症候群対策について発表。民間事業者の協力を得ながら、QOL健診を進める取り組みを語

った。ほかに、腸内環境や認知機能、人工知能(AI)を活用したヘルスケアなど最新の研究成果が紹介された。